

# 夜叉ヶ池

泉鏡花

青空文庫



場所 越前国大野郡鹿見村琴弾谷

時 現代。——盛夏

人名 萩原晃（鐘楼守）

百合（娘）

山沢学円（文学士）

白雪姫（夜叉ヶ池の主）

湯尾峠の万年姥（眷属）

白男の鯉七

大蟹五郎

木の芽峠の山椿

鯖江太郎

鯖波次郎

虎杖の入道

十三塚の骨

夥多の影法師

黒和尚鯨入（剣ヶ峰の使者）

与十（鹿見村百姓）

その他大勢

鹿見宅膳（神官）

権藤管八（村会議員）

斎田初雄（小学教師）

畑上嘉伝次（村長）

伝吉（博徒）

小烏風呂助（小相撲）

穴隈鉦蔵（県の代議士）

劇中名をいうもの。——（白山剣ヶ峰、千蛇ヶ池  
の公達）

みくにだけ 三国岳ふもとの麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。——幕を開く。

はぎわらあきら 萩原 晃 この時白髪しらがのつくり、鐘楼しょうろうの上に立ちて夕せきよ

陽うを望みつつあり。鐘楼は柱つたに蔦つたからまり、高き石段こけに苔

蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐おもむろに段を下りて、清水に米を

磨とぐお百合ゆりの背後ゆに行く。

晃 水は、美しい。いつ見ても……美しいな。

百合 ええ。

その水の岸あやめに菖蒲あやめあり二三輪あやめ小さき花咲く。

晃 綺麗きれいな水だよ。(微笑ほほえむ。)

百合 (白髪びんの鬢びんに手を当てて)でも、白いのですごいますもの。

晁 そりや、米を磨いでいるからさ。……（かまち框の縁に腰を掛く）

お勝手働き御苦労、せつかくのお手を水仕事で台なしは恐多い、  
ちとお手伝いと行こうかな。

百合 可ようございますよ。

晁 いや……お手伝いという処だが、お百合さんのそうした処は、  
咲残った菖蒲を透いて、水に影が映さしたようでお綺麗だ。

百合 存じません。

晁 賞ほめるのに怒る奴やつがありますか。

百合 おなぶり遊ばすんでございますものを。——そして旦那だんなざ  
様まは、こんな台所へ出ていらつしやるものではありません。

早くお机の所へおいでなさいまし。

晃 鐘を撞く旦那はおかしい。実は権助ごんすけと名を替えて、早速おまんま飯にありつきたい。何とも可おそろし恐く腹が空いて、今、鐘を撞いた撞しゅもく木が、杖つえになれば可いいいと思つた。ところで居いざいそく催促いざいそくという形かたもある。

百合 ほほほ、またお極きまり。……すぐお夕飯にいたしましょうねえ。

晃 手品じやあるまいし、磨いでいる米が、飯に早変わりはしそうもないぜ。

百合 まあ、あんな事を——これは翌朝あしたの分を仕掛けておくのでございますよ。

晃 翌朝の分——ああ、お所帯しよたいもち、さもあるべき事です。い

や、それを聞いて安心したら、がっかりして余計空いた。

百合 何でございますねえ。……お菜も、あの、好きな鳴焼しぎやきをして上げますから、おとなしくしていらっしやいまし。お腹が空いたって、人が聞くと笑います。

晃 (縁を上る) 誰に遠慮がいるものか、人が笑うのは、ね、お前。

百合 はい。

晃 お互いに朝寝の時――

百合 知りませんよ。(莞爾俯向く。にっこりうつむ)

晃 煩うるさく藪蚊やぶつかが押寄せた。裏縁で燻いぶしてやろう。(納戸、背後うしろ

むきに山を仰ぐ) ……雲の峰を焼落やきおとした、三国ヶ岳は火のよ

うだ。西は近江<sup>おうみ</sup>、北は加賀<sup>かすか</sup>、幽<sup>ひでりほのお</sup>に美濃<sup>みの</sup>の山々峰々、数万<sup>すまん</sup>の松<sup>たいま</sup>明<sup>つ</sup>を列<sup>つら</sup>ねたように早<sup>ひでりほのお</sup>の焰<sup>ひ</sup>で取卷<sup>ひ</sup>いた。夜叉ヶ池<sup>やしや</sup>へも映<sup>うつ</sup>るらしい。ちようどその水の上あたり、宵の明星の色さえ赤い。……

なかなか雨らしい影もないな。

百合 ……その竜が棲<sup>す</sup>む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します。ここの清水も気のせいやら、流<sup>ながれ</sup>が沢山<sup>たんとや</sup>痩せました。このご

ろは村方で大騒<sup>さわ</sup>ぎをしています。……暑<sup>あな</sup>さは強<sup>あ</sup>し……貴方<sup>あなた</sup>、お身体<sup>からだ</sup>に触<sup>さわ</sup>りはしますまいかと、——めしあがりものの不自由な

片山里は心細い。私はそれが心配でなりません。

晃<sup>な</sup>流<sup>が</sup>が細<sup>な</sup>ったって構<sup>な</sup>うものか。お前こそ、その上夏<sup>な</sup>瘦<sup>が</sup>せをしな  
いが可<sup>い</sup>い。お百合さん、その夕顔の花に、ちよつと手を触<sup>ふ</sup>つて

みないか。

百合 はい、どういたすのでございますか。

晃 花にも葉にも露があらうね。

百合 ああ冷い。水の手にも涼しいほど、しっとり花が濡れましたよ。

晃 世間の人には金が要ろう、田地も要ろう、雨もなければなるまいが、我々二人活いきるには、百日照つても乾きはしない。その、露があれば沢山なんだ。(おもて 戸外に向える障子を閉とぎす。)

百合 貴方、お暑うございましょう。開けておおきなさいましても、もう、そちこち人も通りますまい。

晃 何、更あらたまつて、そんな心配をするものか。……晩方閉とじこ込んで一ひ

といぶ  
 燻し燻しておく、蚊が大分楽になるよ。

時に蚊遣かやりの煙なびく、

学円。日に焼けたる Panama 帽子、背広の服、落着おちつきのある人

体んでいなり。風呂敷包はすを斜しよに背きい、脚絆きやはん草鞋わらじ穿ばき、杖ステッキづくりの

洋傘こうもりをついて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

学円 今朝、明六あけむつの橋を渡つて、ここで暮六つの鐘を聞いた。

……

お百合は筧ざるに米をうつす。

学円 やあ、お精が出ます。(と声を掛く。)

百合 はい。(見向く。)

学円 途中、睨なわての竹藪たけやぶの処へ出て……暗くなつた処で、今しが

た聞きました。時を打ったはこの鐘でしような。

百合 さようでございます。

学円 音も尊い！……立派な鐘じゃ。鐘楼へ上つてみても差支えはありませんか。

百合 (箠を抱えて立つ) ええ、大事ござんせん。けれども貴客、御串戯ごじょうだんに、お杖やなんぞでおたた敲き遊ばしては不可いけません。

学円 西瓜すいかをかう買うのではありません。決してたた敲いてはみますまい。  
(笑う。)

百合 御串戯おっしゃいます。……いいえ、悪いたずら戯を遊ばすようなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、その鐘は、明六つと、暮六つと、夜中丑満うしみつに一度、——三度のほかは鳴らさ

ない事になっておりますから、失礼とは存じましたが、ちよつと申上げたのでございます。さあ、どうぞ御遠慮なく、上つて御覧なさいまし。(夕顔の垣根について入んとす。)

学円 ああ、ちよつと……お待ち下さい。鐘を見ようと思ひますが、ふと言をことばを交わしたを御縁に、余り不ぶ躋しつがましい事じやが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞い下さらんか。

百合 お易い事でございます。さあ、貴客あなた、これへお掛けなさいまし。

学円 御免下さいよ。

百合 真まことに見苦しゅうございます。

学円 これは——お寺の庫裡くりとも見受ません。御本堂は離れてい

ますか。

百合 いいえ、もう昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はな  
いのでございます。

学円 鐘ばかり……

百合 はい。

学円 鐘ばかり……成程、ところで西瓜の一件じや。（帽子を脱

ぐ、ほとんど剃ていはつ髪したるときいちぶがり一分刈の額なを撫でて）や、

西瓜と云えば、内に甜まくわうり瓜でもありませんまいか。——茶店で

もない様子——（見廻す。）

片山かたやまが家の暮れ行く風情、茅屋かややの低き納戸の障子ほかげに灯影映る。

学円 この上、晩飯の御難題は言出しませんが、いかんとも腹が

空いた。

百合 ほほ。(と打笑<sup>うちえ</sup>み) 笥<sup>かけひ</sup>の下に、梨<sup>ありのみひや</sup>が冷してござんす、上げ

ましよう。(と夕顔の蔭に立廻る。)

学円 (がぶがぶと茶を呑<sup>の</sup>み、衣兜<sup>ポケット</sup>から扇子を取つて、煽<sup>あお</sup>いだのを、と翳<sup>かざ</sup>して見つつ) おお、咲きました。貴女<sup>あなた</sup>の顔を見るよ  
うに。

百合 ええ？(聞返す。)

学円 いや、髪の色を見るように。

百合 もう、年をとりますと、花どころではございませぬ。早く

干瓢<sup>かんぴょう</sup>にでもなりますれば、……とそればかりを待つており

ます。

学円 ナイフ 小刀をこれへお遣わし……私が剥むきます。——お世話を掛

けてはかえつて気遣いな。どれどれ……旅の事欠け、不器用ながら、梨なしの皮ぐらいは、うまく剥きます。おおおお氷よりよく冷えた。玉を削るとはこの事じやろう。

百合 旅を遊ばす御様子にお見受け申します……あなた 貴客は、どれから、どれへお越しなさいますえ？

学円 さて名告なのりを揚げて、何の峠を越すと云うでもありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問という処を、遣やつて歩あるく……もつとも、かえりみち 帰途です。——涼しく

ば木の芽峠、音に聞こえた中の河内かわちか、ひさし（廂はずれに山見る眉峰ちややの茶店ちやくみおんなに茶汲女あかまえだれが赤前垂あかまえだれというのが事実なら、ほうそう 疱瘡

の神の建場たてばでも差支えん。湯の尾峠を越そうとも思います。――

――落着く前さいきは京都ですわ。

百合 お泊りは？ 貴客あなた、今晚の。

学円 ああ、うっかり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言ことば尻じり

に着いて、宿の御無心申さんとも限らんど。はははは、いや、

串じょうだん戯ごじゃ。御心配には及ばんが、何と、その湯の尾峠の茶

汲女は、今でも赤前垂じやろうかね。

百合 山また山の峠の中に、嘘のようにもお思いなさいましょうが、まったくだと申します。

学円 谷の姫百合も緋色ひいろに咲けば、何もそれに不思議はない。が、この通り、山ばかり、重かさなり累かさなる、あの、巔いただきを思うにつけて、：

：夕焼雲が、めらめらと巖いわに焼込やけこむようにも見える。こりや、赤前垂より、雪女郎すずめで凄すこうても、中の河内かちが可いいかも分らん。

何にしろ、暑い事じやね。——やつとここで呼い吸きをついた。

百合 里では人ひと死じもありまますツて……酷ひどい早ひでりでございませもの。

学円 今朝なから難なん行ぎ苦行きぎようの体ていで、暑あつさに八九里やちり悩なやみましたが

——可おそ恐ろしい事には、水らしい水みづというのを、ここに來てはじ

めて見ました。これは清水と見えます。

百合 裏うらの岨がけから湧わきますのを、笥かけひにうけて落おします……細ない流ながれ

でございませが、石いしに当あつて、りんりんと佳いい音ねがしますので、

この谷やを、あの琴こと弾ひ谷だにと申まします。貴客きやく、それは、おいしい

冷ひやい清水。……一杯いっぱい汲くんで差さ上げませようか。

学円 何が今まで我慢が出来よう、鐘堂つりがねどうも知らない前に、この美しい水を見ると、逆蜻蛉さかとんぼで口をつけて、手で引摺ひつつかんでがぶがぶと。

百合 まあ、私はどうしましょう、知らずにお米を磨とぎました。

学円 いや、しらげ水は菖蒲あやめの絞しぼり、夕顔の花の化粧になったと見

えて、下流の水はやつぱり水晶。ささ濁りもしなかつた。が、

村里一統、飲む水にも困るらしく見受けたに、この源みなもとまで来

ないのは格別、流れを汲取るものもなかつたように思う……何

ぞ仔細しさいのある事じやろうか。

百合 あの、湧きますのは、裏の畦がけでござんすけれど。

学円 はあ、はあ。……

百合 水の源はこの山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄<sup>すこ</sup>い大池がございます。その水底<sup>みなそこ</sup>には竜が棲<sup>す</sup>む、そこへ通うと云いまして——毒があると可<sup>こ</sup>恐<sup>わ</sup>がりません。——もう薄暗くて見えますまいけれども、その貴客<sup>あなた</sup>、流<sup>ながれ</sup>の石には、水がかかつて、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒<sup>まじ</sup>も交つて、それは綺麗でございますのを、お池の主の眷<sup>けんぞく</sup>属<sup>うろこ</sup>の鱗<sup>うろこ</sup>がこぼれたなんのツて、気味が悪いと申すんでございますから。……

学円 綺麗な石が毒蛇の鱗？ や、がぶがぶと、豪<sup>えら</sup>いことを遣<sup>や</sup>つてしもうた。(と扇子をもつて胸を打つ。)

百合 まあ、(と微笑<sup>ほほえ</sup>み)私どもがこの年まで朝夕飲んで何ともない、それをあの、人は疑うのでございます。

学円 もつとも、もつとも。ものを疑うのは人間の習いですよ。

私は今のお言ことばで、決して心配はしますまい。現に朝夕飲んでおられる、——この年紀としまで——（と打ち瞻まもり）お幾歳いくつじゃな。

百合 ……………

学円 まあさ、失礼じゃが、お幾歳です？

百合 御免なさいまし、……………忘れまして。……………

学円 ははは、俚言ことわざにも、婦人に対して、貴女はいつ死ぬとは問うても可いい。が、いつ生れた、とは聞くな——とある。これは無遠慮に出過ぎました。……………お幾歳じゃと年紀としは尋ねますまい。時に幾干いくらですか。

百合 幾干かとおっしゃって？

学円 代価じゃ。

百合 あの、お代、何の？……お宝……ま、滅めっそう相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

学円 茶も茶じゃが、いやあこれは、髯ひげのようにもじやもじやと聞えておかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商売でのうても無代価では心苦しい。ずばりと余計なら黙つても差置きませんが、旅空なり、御覧の通りの風体ふうてい。ちやんと云うて取つて下さい。

百合 そうまでお気が済みませんなら、少々お代を頂きましようか。

学円 勿論ともな。

百合 でも、あの、お代とさえ申しますもの、お宝には限りませ  
ん。そのかわり、短いでも可ようござんす、お談はなし話を一つ、お  
聞かせなすつて下さいましな。

学円 談話をせい、……談話とは？

百合 方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しでございます。  
学円 その談話を？

百合 はい、お代のかわりに頂きます。貴客あなたには限りませず、薬

売の衆、行ぎようじや者、巡礼、この村里の人たちにも、お間に合う

ものがございますして、そのお代をと云う方には、誰方どなたにも、お談

話を一条ひとつずつ伺います。沢山たんとお聞かせ下さいますと、お泊め申

しもするのでござんす。

学円 むむ、これこそ談話じゃ。（と小膝こひざを拍うて）面白い。話し

ましよう。……が、さて談話というて、差当り——お茶代になるのじゃからつて、長崎から強飯こわめしでもあるまいな。や、思出した。しかもこの越前えちぜんじゃ。

晃 （細く障子を開き差覗さしのぞく。）

時に小机に向いたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らんとしたるなるが、学円と双方、ふと顔を合せ、何とかしけん、燈火ともしびをふつと消す。

百合 どんなお話、もし、貴客あなた。

学円 ……時にここで話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合　いいえ、外ほかにはお月様ばかりでござんす。

学円　道理こそ燈あかりが消えて、ああ、蚊遣かやりの煙で、よくは見えぬが、

……納戸に月が射さすらしい。——お待ちなさい。今、言いかけ

た越前の話というのは、縁の下で牡丹餅ぼたもちが化けたのです。たと

えば、ここで私わしがものを云うと、その通り、縁の下で口真似を

する奴やつがある。村中が寄よつて集たかつて、口真似するは何ものじや。

狐か、と聞くと、違ちがう。と答える。狸か、違ちがう、獺かわうそか、違ちがう、

魔か、天狗てんぐか、違ちがう、違ちがう。……しまいに牡丹餅か、と尋ねた

時、おうと云つて消え失うせたという——その話をする気であつ

たが、……まだ外に、月が聞くと言いわゆるから、出直して、別

の談話はなしをする気になつた。お聞きなさい。これは現在おとし一昨年おとしの

夏——

一人、私の親友に、何かかねて志す……国々に伝わった面白い、また異かわつた、不思議な物語を集めてみたい。日本中残らずとは思うが、この夏は、山深い北ほっこく国筋の、谷を渡り、峰を伝つて尋ねよう、と夏休みに東京を出ました。——それつきり、行方が知れず、音沙汰なし。親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽くして捜したが、皆目跡あとかた形が分らんから、われわれ友だちの間にも、最早もはや世にない、死んだものと断念あきらめて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世間えらで豪い騒ぎをした。……

自殺か、怪我けがか、変死かと、果敢はかない事に、寄ると触ると、袂たもと

を絞って言い交わすぞ！ あとを隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男じやに、貴女、世間には変った事がありましような。……

百合 ああ、あなた貴客、ありがと貴客、難有う存じます。……ほんとうに難有う存じました。（とにべなく言う。）

学円 そんなに礼を云うて、茶代のかわりになるのですかい。

百合 もう沢山でございます。

学円 それでは面白かったのじゃね。

百合 ……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは沢山でございます。

学円 さて談話はなしはこれからなんじや、今のはほんの前提まえおきですが。

百合 どうぞ、……結構でございますから、……そして貴客、もう暗くなります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でございませうから、……

学円 いやいや、談話の模様では、宿をする事もあると言われた。  
私わしも一つ泊めて下さい、——この談話は実みがありますから。

百合 先刻さつきは、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くんじゃない。

……その言ことばについて、宿の無心でもされたらどうするとおっしゃって。……もう、清すずしい涼いお方だと思いましたが、……女ばかり居る処で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は  
気味が悪い。

学円 気味が悪いな？ 牡丹餅の化けたのではないですが。

百合　こんな山家は、お化ばけより、都の人が可恐こおうござんす、……  
 さ、貴客どうぞ。

学円　これは、押出されるは酷ひどい。（不承々々に立つ。）  
 百合　（続いて出で、押遣おしやるばかりに）どうぞ、お立ち下さいまし。

学円　婦人ばかりじゃ、ともこうも言われぬか。鉢の木ではない  
 のじゃが、蚊なに焚たく柴もあるものを、……常世つねよの宿なら、こう  
 情なさけなくは扱あうまい。……雪の降らぬがせめてもじゃ。

百合　真夏土用の百日ひでり早ひに、たとい雪が降ろうとも、……（と立  
 ちながら、納戸の方を熟じっと視みて、学円に瞳を返す。）御機嫌よ  
 う。

学円 失礼します。

晃 (衝と蚊遣かやりの中に姿を顕あらわし) 山沢、山沢。(ときつぱり呼ぶ

。)

学円 おい、萩原、萩原か。

百合 あれ、貴方あなた。(と走り寄つて、出足を留めるように、膝を

突き手に晃の胸をおさえる。)

晃 帰りやしない、大丈夫、大丈夫。(と低声こごえに云つて) 何とも

言いようがない、山沢、まあ——まあ、こちらへ。

学円 私わしも何とも言いようが無い。十に九ツ君だろうと、今ね、

顔を見た時、また先刻さつきからの様子でもそう思つた、けれども、

余り思掛けなし——(引返してかまちにきた来り) 第一、その頭はどう

したい。

晃 頭もどうかしていると思つて、まあ、許して上つてくれ。

学円 ほこり 埃ばかりじゃ、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入

る）いや、その頭も頭じゃが、白髪はどうじゃ、白髪はよ？…

…

晃 これか、谷底に棲すめばといつて、大蛇うわばみに吞くまれた次第わけでは

ない、こいつは仮髪かつらだ。（脱いで棄てる。）

学円 ははあ…（とお百合を密そつと見て）勿論もちろんじゃな、その何も

…

晃 こりや、百合と云う。

お百合、座に直つた晃の膝に、そのまま俯伏うつぶして縊すがっている。

学円 お百合さんか。細君も……何、奥方も……

晃 泣く奴があるか、涙を拭いて、整然ちやんとして、御挨拶ごあいさつしな。

と言ううちに、極きまり悪そうに、お百合は衝つと納戸へかくれる。

晃 君に背中を敲たたかれて、僕の夢が覚めた処で、東京に帰るかつて憂慮きづかいなんです。

学円 (お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら) いや、

私わしの顔を見たぐらいで、萩原——この夢は覚めんじやろう。：

：何、いい夢なら、あえて覚めるには及ばんのじゃ……しかし

萩原、夢の裡うちにも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃 むむ。

学円 君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか分らんが、

皆まず御無事じや。

晃 ああ、そうか。難有ありがたい。

学円 私わしに礼には及ばない。

晃 実に済まん！

学円 さてこれはどうしたわけじや。

晃 夢だと思つて聞いてくれ。

学円 勿論、夢だと思つておる。……

晃 委くわしい事は、夜すがらにも話すとして、知つてる通り……僕

は、それ諸国の物語を聞こうと思つて、北国筋を歩行あるいたんだ。

ところが、自身……僕、そのものが一条ひとつだけの物語になつた訳だ。

——魔法つかいは山を取つて海に移す、人間を樹にもする、石

にもする、石を取って木の葉にもする。木の葉を蛙にもするといふ、……君もここへ来たばかりで、もの語の中の人になつたらう……僕はもう一層、その上を、物語、そのものになつたんだ。

学円 薄気味の悪い事を云うな。では、君の細君は、……（云いつつ憚る。）

晃 （納戸を振向く）衣服でも着換えるか、髪など撫つけているだろう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

学円 （伸上り納戸越に透かして見て）おい、水があるか、蘆の葉の前に、櫛にも月の光が射して、仮髪をはずした髪の艶、雪国と聞くせいか、まだ消残って白いように、襟脚、脊筋も透通

る。……すご凄いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかいか。

晃 かわいそう可哀想な事を言え、まさか。

学円 ふん。

晃 この土地、この里——この琴弾谷が、ひとつ一個の魔法つかいだと

云うんだよ。——

山沢、君は、この山奥の、夜叉ヶ池というのを聞いたか。

学円 聞いた。しかもその池を見ようと思つて、いまじょう今 庄 駅から

五里ばかり、いりこわざわざここまで入込んだのじゃ。

晃 おとし僕も一昨年、その池を見ようと思つて、ただ一人、この谷へ

入つたために、こういう次第になつたんだ。——ここに鐘があ

る——

学円 ある！ 何か、明六つ、暮六つ……丑満うしみつ、と一昼夜に三度鳴らす。その他は一切音をさせない定さだめじやと聞いたが。

晃 そうだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度ずつは必ず鳴らさねばならないんだ。

学円 それは？

晃 ここに伝説がある。昔、人と水と戦つて、この里の滅びようとした時、越えつの大徳泰澄だいたくたいちようが行ぎようりき力で、竜神をその夜叉ヶ池ふうじこに封ふう込んだ。竜神の言うには、人の溺おぼれ、地の沈むを救うために、自由を奪うばわるるは、是非に及およばん。そのかわりに鐘かねを鑄ふて、麓ふもとに掛かけて、昼夜に三度ずつ撞つ鳴ならして、我を驚おどかし、その約束を思出おもさせよ。……我が性は自由を想おもう。自在を欲ほす

る。氣ままを望む。ともすれば、誓ちかいを忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲みなぎらそうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものの数ともするものでない。が、約束は違たがえぬ、誓は破らん——但しその約束、その誓を忘れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞つく事を怠るな。——山沢、そのために鑄た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、たちどころに大雨たいう、大雷だいらい、大風とともに、夜叉ヶ池から津浪が起つて、村も里も水の底に葬つて、竜神は想うままに天地を馳はすると……こう、この土地で言伝える。……そのために、明六つ、暮六つ、丑満つ鐘を撞く。……

学円 (乗出でて) 面白い。

晃 いや、面白いでは済まない、大切な事です。

学円 いかにも大切な事じゃ。

晃 ところで、その鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思う。

学円 君か。

晃 僕だよ。すなわち萩原晃がその鐘撞夫かねつきなんだよ。

学円 はてな。

晃 ここに小屋がある……

学円 むむ。

晃 鐘撞が住む小屋で、一おととし年の夏、私が来て、代るまでは、弥や

太兵衛たべえと云う七十九になる爺じいさん様が一人居て、これは五十年以こ

来のかた、いかな一日も欠かす事なく、一昼夜に三度ずつこの鐘を

打つていた。

山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たと云う。私がやつぱり、池を見ようと、この里へ来た時、暮六つの鐘が鳴つたんだ。弥太兵衛爺じじいに、鐘の所謂いわれを聞きながら、夜があけたら池まで案内させる約束で、小屋へ泊めて貰つた処。

その夜、丑満うしみつの鐘を撞いて、鐘楼しょうろうの高い段から下りると、爺じいは、この縁前えんさきで打倒ぶつたおれた——急病だ。死ぬくるしみ苦悩くるしみをしながら、死切れないと云つて、悶もだえる。——こうした世間だ、もう以前から、村一統鐘の信心が消えている。……爺じいが死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌たなそこをめぐらさ

ず、田地田畠、陸は水になる、沼になる、淵ふちになる。幾万、何千の人の生命いのち——それを思うと死ぬるも死切れぬと、呻吟うめいて搔もがく。——虫より細い声だけれども、五十年の明暮あけくれを、一生懸命、そうした信仰で鐘楼を守り通した、骨と皮ばかりの爺じいが云うのだ。……鐘かねの自おのから鳴るごとく、僕の耳に響いた。……且かつは臨終くげんの苦患あわれの可哀さに、安心をさせようと、——心配をするな親仁おやし、鐘は俺が撞いてやる、——とはつきり云うと、世にも嬉しそうに、ニヤニヤと笑って、拝みながら死んだ。その時の顔を今に忘れん。

が、まさか、一生、ここに鐘を撞いて終ろうとは思わなかった。丑満は爺が済ました、明六つの鐘一度ばかり、代って撞くぐら

いにしか考えなかつた。が、まあ、爺が死ぬ、村のものを呼ぼうにも、この通り隣家となりに遠い。三度の掟おきてでその外は、火にも水にも鐘を撞くことはならないだろう。

学円 その鳴らしてならないというは、どうした次第わけじゃね？

晃 鐘は、高く、ここにあって——その影は、深く夜叉ヶ池の碧へ

きたん潭たんに映ると云う。……撞しゅもく木を当てて鳴る時は、こがらし凧かかしにすら、

そよりとも動かない、その池の水が、さらさらと波を立てると聞く。元来、竜神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、礼を欠く事に当る。……

学円 その道理じゃ、むむ。

晃 鐘も鳴らせん……処で、不知案内の村を駈かけまわ廻まわつて人を集め

た、——サア、弥太兵衛の始末は着いたが、誰も承合うけあつて鐘を撞つこうと言わない。第一、しかじかであるからと、爺じいに聞いた伝説を、先祖の遺言のように厳おごに言かつて聞かせると、村のものは哄どつと笑う。……若いものは無理もない。老寄としよりどもも老寄どもなり、寺の和尚おしやうまでけろりとして、昔話なら、桃太郎の宝を取つて帰つた方が結構でござる、と言う。癩しやくに障さつた——勝手にしろ、と私もそこから、（と框かまちを指し）草鞋わらじを穿はいて、すたすたとこの谷を出て帰つたんだ。帰る時、鹿見村しかみむらのはずれの土橋たもとの袂えのきに、榎えのきの樹の下に立たつてしよんぼりと見送つたのが、（と調子を低く）あの、婦人おんなだ。

その日の、明六つの鐘さえ、学校通いの小児こどもをはじめ、指ゆびしを

して笑う上で、私が撞いた。この様子では、最早や今日から、暮六つの鐘は鳴るまいな！……

もしや、岩抜け、山津浪、そうでもない、大暴風雨で、村の滅

びる事があつたら、打明けた処……他は構わん、……この娘の

生命もあるまい——待て、二三日、鐘堂を俺が守ろう。そ

の内には、とまた四五日、半月、一月を経るうちに、早いもの

よ、足掛け三年。——君に逢うまで、それさえ忘れた。……ま

た、忘れるために、その上、年に老朽ちて世を離れた、と自分

でも断念のため。……ばかりじゃ無い、……雁、燕の行きかえ

り、軒なり、空なり、行交う目を、ちよつとは紛らす事もある

うと、昼間は白髪かつらの仮髪かむを被る。

学円 （默然<sup>もくねん</sup>として顔を見る。）

晃 （言葉途絶える） そう顔を見るな、恥入った。

学円 （しばらく、打案じ）すると、あの、……お百合さんじゃ、その人のために、ここに隠れる気になったと云うのじゃ。

晃 ……ますます恥入る。

学円 いや、恥ずるには及ばん。が、どうじゃ、細君を連れて東京に帰るわけには行かんのかい。

晃 何も三ヶ国と言わん。越前一ヶ国とも言わん。われわれ二人が見棄てて去って、この村と、里と、麓<sup>ふもと</sup>に棲<sup>す</sup>むものの生命をどうする。

学円 萩原、（と呼びつつ、寄り）で、君はそれを信ずるか。

晁 信ずる、信ずるようになった。萩原晁はいぎ知らん、越前国  
 三国ヶ岳の麓、鹿見村ことひきだに琴弾谷の鐘楼守しょうろうもり、百合の夫の二代  
 の弥太兵衛は確たしかに信じる。

学円 (ひたりと洋服の胡坐あぐらに手をおき) 何にも言わん。そう信  
 ぜい。堅く進ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、  
 天がこの村のために、お百合さんを造り置いて、鐘楼守を、こ  
 こに据えられたものかも知れん。君たち二人はふたはしら一柱の村の  
 神じゃ。なかんずく就中、お百合さんは女神じゃな。

百合 (行燈あんどんを手に黒髪美しく立出づる) 私、どうしたら可よう  
 ございましょう。

学円 や、これは……

百合 貴客あなた、今ほどは。

学円 さて、お初に……はははは、奥さん。

百合 まあ。……（と恥らう。）

晁 これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。

百合 （黙って手をつく。）

学円 はいはい。いや、御挨拶はもう済みました。貴女あなたは出ま

せなんだか。

晁 うっかり嚏なんぞすると、蚊が飛出す。

百合 あれ、沢山たんとおなぶんなさいまし。

晁 そんなに、お前、白粉おしろいを粧つけて。

百合 あんな事ばかりおっしやる。(と優しく睨にらんで顔を隠す。)

学円 何にしろ、お睦むつまじい……ははははは、勝手にお噂うわさをしまし

たが、何は、お里方、親御、御兄弟は？

晃 山沢、何にもない孤みなしご児こなんだ。鎮守の八幡はちまんの宮の神官かみぬし

の一人娘で、その神官の父親おとつさんも亡くなつた。叔父があつて、

それが今、神官の代理をしている。……これの前だが、叔父と

いうのは、了りようけん簡けんのよくない人でな。

学円 それはそれは。

晃 姪めいのこれを、附けつ廻まわしつしたという大難だいなんぶつです。

百合 ほんとうに、たよりのない身体からだでございます。何にも存じ

ません、不束ふつつかものでございますけれど、貴客あなた、どうぞ御ごふび

んをお懸けなすつて下さいまし。(しんみりと学円に向つて三み指つゆびして云う。)

学円 (引き入れられて、思わず涙ぐむ。) 御殊勝ですな。他人のようには思いません。

晃 (同じく何となく胸せまる。涙を払つて) さあさあ、親類と  
いうお言葉なんだ。遠慮のない処、何にも要らん。御吹聴ごふいちようの  
鳴焼しぎやきで一杯つけな。これからゆつくり話すんだ。山沢、野菜  
は食わしたいぜ、そりや、甘いぞ。うま

学円 奥方、お立ちなさるな。トそこでじゃな、萩原、私は志わしし  
た通り、これから夜を掛けて夜叉ヶ池を見に行くゆ気じや。種いろい  
々ろ不思議な話を聞いたら、なお一層見たくなつた。御飯はお

手料理で御馳走ごちそうになるうが、お杯には及ばん、第一、知ってる通り、一滴も飲めやせん。

晃 成程、そうか、夜叉ヶ池を見に来たんだ。……明日あしたにしては、と云うんだけれども、道は一里余り、が、上りが峻けわしい。この暑さでは夜が可いい。しかし、四五日は帰さんから、明日の晩にしてくれないかい。

学円 いや、学校がある。これでも学生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、もう切詰めじや。

晃 それは困った、学校は？……先刻さつき、落着く先は京都だと云ったようだな。

学円 むむ、去年から。……みやづかえの情なさけなさじや。何しろ、

急ぐ。

晃 分つた、では案内かたがた一所に行く。

学円 君も。

晃 ……直ぐに出掛けよう。

学円 それだと、奥方に濟まんぞ。

晃 何を詰つまらない。

百合 いいえ……（と云いしがしおしおと）貴方あなた、直ぐにとおつ

しやつて、……お支度は、……

晃 土橋の煮染屋にしめやで竹の皮づつみと遣やらかす、その方が早手廻はやてまわし

だ。鰯にしんの煮びたし、焼どうふ、可よかろう、山沢。

学円 結構じゃ。

晁 事が決れば早いが可い。源佐衛門は草履で可し、最明時ど  
のは、お草鞋わらじ、お草鞋。

学円 やあ、おもしろい。奥さん、いずれ帰途かえりには寄せて頂く。

私は味噌汁が大好きです。小菜こなを入れて食べさして発たせて下さい。  
い。時に、帰途はいつになろう。……

晁 さあ、夜よが短い。明方になろうも知れん。

学円 明けがた……は可いが、（と草鞋を穿はきながら）待て待て、  
一所に気軽に飛出して、今夜、丑満つの鐘はどうするのじゃ。

晁 百合が心得ておる。先代弥太兵衛と違う。仙人ではない、生  
身の人間。病気もする、百合が時々代るんだよ。

学円 では、池のあたりで聞きましたよう。——奥方すっかり願

ます。

百合 はい、内をお忘れなさいませんように、私は一生懸命に。

(と涙声にて云う。)

晃

……おい、あの、弥太兵衛が譲りの、お家の重宝ちようほうと云う

ひようたん

瓢箪を出したり、酒をかう。——それから鎌を貸しな、滅

多に人の通わぬ処、路はあつても熊笹ぐらいは切らざあなるまい。……早くおし。

百合 はい、はい。

学円 やあ、どぎどぎと鋭いな。(と鎌を見る。)

晃 月影に……(空へかぎす)なお光るんだ。これでも鎌を研とぐ

ことを覚えたぜ。——こつちだ、こつちだ。(と先へ立つ。)

百合 お気をつけ遊ばせよ。(とうるみ声にて、送り出づる時、

可愛かわゆき人形袖にあり。)

晃 何だい、こんなもの。(見返る。)

百合 太郎がちよつとお見送り。(と袖でしめつつ) 小父おじちゃん

もお早くお帰りなさいまし、坊やが寂しゆうございます。(と

云いながら、学円の顔をみまもり、小家こやの内を指し、うつむい

てほろりとする。)

学円 (庇かばう状さまに手を挙げて、また涙ぐみ) 御道理ごもつともじゃ、が、

大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、(と云つて晃に向きかえ)

私わしに逢うて、里心が出て、君がこれなり帰るまいか、という御

心配じゃ。

百合 (きまりわるげに、つと背向せむきになる。)

晃 ああ、それで先刻さつきから……馬鹿、嬰ねんねえ児ねえだな。

学円 何かい、ちよつと出懸でがけに、キスなどせんでも可いいかい。

晃 旦那方だんなじゃあるまいし、鐘かね撞つ弥太兵衛やたいへいでがんすての。

と兩人連立ち行く。

百合 (熟じつとしばし)まさかと思うけれど、ねえ、坊や、大丈夫

お帰かえんなさるわねえ。おとおお目めを瞑ねむつて、領うなずいて、まあ、

可愛い。(と頬ほお摺すりし)坊ぼやは、お乳つぼをおあがりよ。母かあさんは

一人でお夕飯ゆふめしも欲ほしくない。早く片附かたづけてお留守留守をしましょう。

一人だと見て取ると、村むらの人が煩うるさいから、月つきは可よし、灯あかりを消けし

て戸かどをしめて。――

とかまち框にずつと雨戸を閉める。閉め果てると、戸のかぎ鍵がガチリと下りる。やがて、納戸のともしび燈、はつと消ゆ。

出る化ものの数々は、一ツ目、見越みこし、河太郎、獺かわうそに、海坊主、天守におさかべ、化猫はあかてぬぐい赤手拭、篠田しのだにくず葛の葉、野干平やかんべい、古狸のはらつづみ腹鼓、ポコポン、ポコポン、コリヤ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鉄漿かねつけおんな着女の、けたけたわらい笑、里の男は、のつぺらぼう。

と唄――

与よじゆう十、竹の小笠おがさをあおむ仰向けに、鯉こいを一尾、嬉しそうな顔して見て、ニヤニヤと笑つて出づ。

与でか十 大い事をしたぞ。へい、雪さ豊年しるしの兆だちゆう、早ひでりうおは魚の

当りだんべい。大沼小沼が干たせいか、じよんじよろ水に、び  
ちやびちやと泳いだ処を、ちよろりと掬しやくつた。……（鯉跳ねる）

わい！ 銀の鱗うろこだ。ずずんと重い。四貫目あるべい。村長様が、

おおいろり

大囲炉裡おおいりの自在竹に掛つた滝登りより、えツと大えでつけ。こりや己おら

がで食おうより、村会議員の髯ひげどのに売るべいわさ。やれ、鯉。

髯どのに身売をしろじや。値になれ、値になれ。（鯉跳ねる）

ふあ、銀の鱗だ。金かねが光る——光るてえば、鱗てえば、ここな、

（と小屋を見て）鐘かねつき撞先生かねつきが打ぶつてしめた、神かみぬし官様の嬢様

さあ、お宮の住居すまいにござつた時分は、背中に八枚鱗が生えた蛇

体だと云つけえな。……そんではい、夜さり、夜ばいものが、

寢床のぞを覗くと、いつでもへい、白蛇しろへびの長いながのが、嬢様のめぐ

り廻つて、のたくるちツて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴やつさえあつけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活いきてござつて、

執とりころ殺されもさつしやらねえ。見ろやい、取つても着

けねえ処に、銀の鱗さ、ぴかぴかと月に光るちツて、汝われがを、

(と鯉をじろじろ) ばけものか蛇体と想うて、手を出さずば、

うまい酒にもありつけぬ処だつたちゆうものだ。——嬢様が手

本だよ。はつてな、今時分、真まつくら暗だ。舐なめころ殺されはしねえだ

かん、待ちろ。(と拔足で寄つて、小屋の戸の隙間すきまを覗く。)

蟹かにごころう五郎。朱顔おどろ、蓬あかげがしらなる赤毛頭、緋ひの衣したる山伏いでたの扮

装ち。山牛蒡やまごぼうの葉にて捲まいたる煙草たばこを、シャと横よこぐわ銜くわえに、

ぱつぱつと煙を噴きながら、両腕を頭上に突張り、ト鋏を極  
 込み、めこしゃがんで横這よこばいに、ずかりずかりと歩行あるき寄つて、与十  
 の潜見すきみする向脛むこうずねを、かつきと挟んで引く。

与十 痛いたえ。(と叫んで)わつ、(と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠

を夕顔の蔭に投ぐ。)ひやあ、藪沢やぶさわの大蟹おおがにだ。人殺し！

と怪けし飛んで遁にぐ。——蟹五郎すかりすかりと横に追う。

鯉こいしち七。鯉の精。夕顔の蔭より、するすると頭あらわる。黒こく白びやくう

鱗ろこの帷子かたびら、同じ鱗うろこ形がたの裁着たっつけ、鰭ひれのごときひらひら

足袋くだん。件の竹の小笠に、面おもてを蔽おほいながら来り、はたとその小

笠なげうを擲なげうつ。顔白く、口のまわり、べたりと髯ひげ黒し。蟹、これ

を見て引返す。

鯉七 (ばくばくと口を開けて、はつと溜息ためいきし) ああ、人間が

ひでり

早の切なさを、今にして思当それつた。某それがしが水離れしたと同然と見

える。……おお、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有ありがたかつたぞ。

蟹五郎 水心、魚心だ、その礼に及ぼうかい。また、だが、滝登りもするものが、何じやとて、笠の台に乗せられた。

鯉七 里へ出る近道してな、無理ながれな流を抜けたと思え。石に鱗が

つまず

躓はださばきいて、膚捌くらのならぬ処を、ばツさりと啖くつた奴よ。

蟹五郎 こいつにか。(と落ちたる笠を挟んでおさ圧える。)

鯉七 鬼若丸以来という、難儀に逢わせた。百姓うぬめが、汝。(と

笠を踏ふむ。)

笠 おれ己じやねえ、己じやねえ。(と、声ばかりして蔭にて叫ぶ。)

鯉七 はあ、いかさま汝きさまのせいでもあるまい。助けてやろう――

そりや行け。やい、稲が実つたら案山かかし子になれ！

と放す。しかけて、竹の小笠はたはたと煽あおつて遁にげる。

はははは飛ぶわ飛ぶわ、かぼちやばたけ南瓜かぼ畠ちやへ潜そろつて候。

蟹五郎 人間の首が飛んだ状さまだな、気味助きびすけ、気味助。かッかッか

ッ。(と笑い) 鯉七、これからどこへ行く。

鯉七 むう、ちと里方ひでりへ用がある。ところで滝を下つて来た。何

が、この頃ひでりの早で、やれ雨が欲しい、それ水をくれる、と百姓

どもが、姫様ひいさまのお住居すまい、夜叉ヶ池のほとりへ五月蠅うるさきほどに

集たかつて来うせる。それはまだ可よい。が、何の禁ましな厭ないか知れぬまで、

鉄釘かなくぎ、鉄火箸かなひばし、鑄さび刀がたなや、破鍋われなべの尻まで持込まむわ。ま

だしもよ。お供物だと血迷つての、犬の首、猫の頭、目を剥き、  
ひげ髯を動かし、舌をべらべら吐く奴を供えるわ。胡瓜きゅうりならば日  
 野川の河童かつばがかじ嚙ろう、もつての外な、汚穢むそうて汚穢うて、お腰  
 元たちが掃除をするに手が懸かかつて迷惑だ。

ところで、姫ひいさま様のお乳母どの、湯尾峠ゆのおとうげの万年姥まんねんうばが、某それがしへ  
 内意うちごⅡ降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒ま  
きち散らすにおいてはその分に置かぬⅡと里へ出て触れい、とあ  
 る。ためにの、この鰭ひれを煩わす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎 その事かい、御苦労、御苦労。ところで、大池の姫ひいさま様  
 には、なかなか雨を下さる思おぼしめし召まは当分ないかい。

鯉七 分らんの。早は何も、姫ひいさま様御存じの事ではない。第一、

其そのもと許なども知る通りよ。姫様は、それ、御縁者、白山はくさんの劍ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、そればかり思詰めてましますもの、人間の早なんぞ構っている暇があるものかツてい。

蟹五郎 神通じんずう広大——俺をはじめ考えるぞ。さまで思悩んでおいでなさらず、両袖で飜然ひらりと飛んで、疾はやく劍ヶ峰へおいでなさるが可よいではないか。

鯉七 そこだの、姫ひいさま様が座をお移し遊ばすと、それ、たちどころに可恐おそろしい大津波が起つて、この村里は、人も、馬も、水の底へ沈んでしまう……

蟹五郎 何が、何が、第一俺が住居すまいも広うなる……村が泥沼にな

るを、何が遠慮だ。勧めろ、勧めろ。

鯉七 忘れたか、鐘つりがねがここにある。……御先祖以来、人間との堅い約束、夜昼三度、打つ鐘を、彼奴等あいつらが忘れぬ中うちは、村は滅びぬ天地の誓盟ちかひ。姫様ひいさまにも随意ままにならぬ。さればこそ、御鬱ごうつか懐い、その御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎 南無三宝なむさんぼう、堂の下で誓を忘れて、鐘つりがねの影を踏もうとした。が、山も田圃たんぼも晃々きらきらとした月夜だ。まだまだしめつた灰も降らぬとなると、俺も沢を出て、山の池、御殿の長屋ゆへ行かずばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七 むむ、その儀は、ぱくりと合点のみこんだ。かわりにはの、道が寂しい……里へは、きこう同道せい。

蟹五郎 帰途かえりはお池へみちづれ伴侶だ。

鯉七 月のなわて暇を、唄うて行ゆこうよ。

蟹五郎 何と唄う？

鯉七 〓 〓 山を川にしよう 〓 〓 と唄おうよ。

蟹五郎 面白い。

と同音に、鯉はふらふらと袖を動かし、蟹は、ぱツぱツと煙けむを吹いて、 〓 〓 山を川にしよう、山を川にしよう 〓 〓 と同音に唄い行く。行掛よどけて淀み、行途むこうを望む。

鯉七 待て、見馴みなれぬものが、何やら田あぜの畝を伝うて来る。

蟹五郎 かつかつ、怪しいものだ。小蔭こがくれて様子を見んかい。

両個、姿を隠す。

百合（人形を抱き、なまめ媚かしき風情にて戸を開き戸外に出づ。）

夜の長い事、長い事……何の夏が明あけやす易かろう。坊やも寝られ

ないねえ、——お月様幾つ、お十三、七つ——今も誰やら唄う

て通つたのをお聞きかい、——山を川にしよ——ああ、この頃

では村の人が、山を川にもしたかろう、お気の毒だわねえ。：

：まあ、良い月夜、峰の草も見えるような。晁さん、お客様の

影も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂かねつきどうあがへ上

りましようね。……ひよつとかして、袖でも触つて鳴ると悪い

ね、田圃たんぼの広場へ出て見ようよ。（と小屋のうらに廻つて入る

。）

鮎ねんにゆう入。花道より、濃い鼠すかしの頭巾ずきん、面一面つらに黒し。

白にこんき二根の髯ひげ、鼻下より左右にわかれて長く裾すそまで垂る。墨染ころもの法衣まとを絡まい、鰭ひれの形したる鼠ねずみの足袋ひふき。一ひとつもと本の蘆あしを杖つえつき、片手に緋ひ総結ふさびたる、美うつくしき文箱ふばこを捧たげて、ふらふらと出きたで来る。

鯨入はるばる 遙々はるばると参まつた。……もつての外かんばつの早はや魃ばつなれば、思うたより道中難儀はるかじゃ。(と遥はるに仰あいで)はあ、争あわれぬ、峰たかねの空そらに水みづ気が立たつ。嬉うれしや、……夜よ叉またヶ池いけは、あれに近い。(と辿たどり寄よる。)

鯉こい、蟹かに、前途ゆくてに立たちああらわるる。

鯉七 誰だ。これへ来たは何なにものだ。

蟹五郎 お山の池の一いちの関せき、藪やぶ沢さわの関せき守もりが控くわえた。名なのつて

通れ。

鯨入 (杖を袖にまき熟と視て) さては縁のない衆生でないの。

……これは、北陸道無双の靈山、白山、劍ヶ峰千蛇ヶ池の御

公達だちより、当国、三国ヶ岳夜叉ヶ池の姫君へ、文づかに参

るものじゃ。

鯨七 おお、聞及んだ黒和尚くろおしやう。

蟹五郎 鯨入は御坊ごぼうかい。

鯨入 これは、いずれも姫君のお身内な。夜叉ヶ池の御眷属ごけんぞくか。

よい所で出会いました、案内を頼みましょう。

蟹五郎 お使つかい、御苦労です。

鯨七 ちと申つかつた事があつて、里へ参る路ではあれども、若

君のお使、何は措おいてもお供しよう。姫様、お喜びの顔が目に見える。われらもお庇かげで面目を施します、さあ、御坊。

蟹五郎 さあ、御坊。

鯰入 (ふと、くなくなとなつて得進えまず。) しばらく。まず、しばらく。……

鯉七 御坊、お草臥くたびれなら、手を取りましょう。

蟹五郎 何と腰を押そうかい。

鯰入 いやいや疲れはしませぬ。尾鰭おひれはのららと跳ねるなれども、ここに、ふと、世にも気懸きかかりが出来たじやまで。

鯉七 気懸りとは？ 御坊。

鯰入 ここまで辿たどつて、いぎ、お池へ参まゐると思えば、急にこの文ふ

箱ばこが、身にこたえて、ずんと重うなつた。その事じや。

鯉七 恋の重荷と言いますの。お心入れの御状なれば、池に近し、御双方お氣が通つて、自然と文箱こもに籠りましたか。

蟹五郎 またかい。姫ひいさま様から、御坊へお引出ものなさる。……

あの、黄金こがねしろがね白銀、米、粟あわの湧わきこぼれる、石臼いしうすの重量おもみが響き  
ますかい。

鯰入 (悄しょうぜん然として) いや、私わしが身こたに応えた処は、こりや虫

が知らすと見えました。御褒美ごほうびに遣わさるる石白いししろなれば可よけれ

どもⅡⅡこの坊主を輪切りにして、スツポン煮を賞しょうがん翫あれ、

姫、お昼寝の御目覚ましにⅡⅡと記してあろうも計られぬ。わ

あ、可恐おそろしや。(とわなわなと蘆の杖とともにふるい出す。)

鯉七 何でまた、そのような飛んだ事を？ 御坊。……

鯉入 いやいや、急に文箱ふばこの重いにつけて、ふと思ひ出した私わしが身の罪科つとがござる。さて、言い兼ねましたが打開けて恥を申そう。(と頸うなじをすくめて、頭を撫なで)……近頃、此方衆こなたしゆうの前ながら、館やかた、劍ヶ峰千蛇ヶ池へ——熊に乗つて、黒髪を洗いに来た山女の年増としまがござつた。裸身はだかみの色の白さに、つい、とろとろとなつて、面目なや、ぬらり、くらりと鱗を滑らかいてまつわりましたが、フトお目触りめざわとなつて、われら若君、もつての外ほかの御機嫌じゃ。——処をこの度の文づかい、泥に潜つた閉門中、ただおおせつけの嬉しさに、うかうかと出て参つたが、心付けば、早や鱗の下がくすぽつたい。(とまた震う。)

蟹五郎 かッ、かッ、かッ、（と笑い）御坊、おまめです。あやかりたい。

鯨入 笑われますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……これは一期じゃ、何としよう。（と寂しく泣く。）

鯉、蟹、これを見て囁き、頷く。

鯉七 いや、御坊、無い事とも言われませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立った見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中気懸りになつて、密とその封じ目を切つて見たれば、〓〓妹御へ、

ひとつ

一、この馬士の腸はらわた一組参らせ候そう〓〓としたためられた——何も知らずに渡そうものなら、腹を割さかるる処であつたの。

鯨入 はあ、（とどうと尻餅つく。）

蟹五郎 お笑止だ。かつかつ。

鯨七 幸さいわい、五郎が鋏はさみを持ちます……密そつと封を切つて、御覧が可よかろう。

鯨入 やあ、何と、……それを頼みたいばかりに恥さを曝さらした世迷言まいごじゃ。……嬉しや、大目に見て下さるかろう。

蟹五郎 もつとも、もつとも。

鯨七 また……（と声を密ひそめて）恋し床ゆかしのお文なれば、そりや、われわれどもがなお見たい。

鯰入 (わななきながら、文箱を押頂き、紐を解く。)

鯉、蟹ひしと寄る。蓋ふたを放つて齊ひとしく見る。

鯰入 やあ!

鯉七 ええええ。

蟹五郎 やあやあやあ!

鯰入 文箱ふぼこの中は水ばかりよ。

と云う時、さつと、清き水流れ溢あふる。

鯉七 あれあれあれ、姫ひいさま様が。

はつと鯰入とともに泳ぐ形に腹ばいになる。蟹ひざまずは跪ひざまずいて手を

支つかう。——迫せりあげ上うへにて——

夜叉ケ池の白雪姫。雪うすものなす羅うすもの、水色の地に紅くれないほのおの焰ほのおを染めたる

襲したがさね衣、黒漆こくしつに銀泥ぎんでい、鱗うろこの帯、下締したじめなし、裳もすそをすら

りと、黒髪長く、丈に余る。銀しろがねの靴をはき、帯腰に玉のごと

く光輝く鉄てつじよう杖をはさみ持てり。両手にひろげし玉章たまがさを

颯さつと繰落して、地摺ちずりに取る。

右に、湯尾峠まんねんうばの万年姥。針のごとき白髪しらが、朽葉色くちばいろの帷かたび

子ら、赤前垂あかまえだれ。

左に、腰元、木の芽峠もえぎの奥山椿もんつき、文金もんつきの高たかま

鬘げに緋ひの乙女椿の花を挿す。両方に手を支ついて附添う。

十五夜の月出づ。

白雪 ふみを読むのに、月の明あかりは、もどかしいな。

姥 御前様おんまえさま、お身体からだの光りからだで御覧みするが可ようござります。

白雪 (下襲したがさねを引いて、袖口の炎かぎを翳し、やがて読果うてて恍う

惚つとりとなる。)

椿 姫ひいさま様。

姥 もし、御前おんまえさま様。

白雪 可なつか懐しい、優しい、嬉しい、お床たよりしい音信なを聞いた。……

姥うば、私は参るよ。

姥 たまたま麓ふもとへお歩行ひろいが。

椿 もうお帰り遊あそばしますか。

白雪 どこへ?…… (と聞返す。)

姥 お住居すまいへ。

白雪 何?

姥 夜叉ケ池へでござりましょう。

白雪 あれ、お前は何を言う……私の行くのは劍ケ峰だよ。

一同 劍ケ峰へ、とおつしやりますると？

白雪 聞かずと大事なものを——千蛇ケ池とは知れた事——このおふみの許へさ。(と巻戻し懐中に納めて抱く。)

姥 (居直り) また……我儘わがままを仰せられます。お前様、ここに鐘つりがねがござります。

白雪 む、(と眈をあげて、鐘楼を屹と見る。)

姥 お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様おんまえさまが、

お座をお移しなさりますれば、幾万、何千の生類いのちの生命を絶たねばなりません。劍ケ峰千蛇ケ池の、あの御方様とても同じ事、

ここへお運びとなりますと、白山谷は湖になりますゆえ、そのために彼方かなたから御越の儀は叶かないませぬ。——姥うばはじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にござります。

白雪 そんな、理窟を云つて……姥、お前は人間の味方かい。

姥 へへ、（嘲笑あざわらい）尾のない猿ども、誰がかばいだていたしまししょう。……憎にくければとて、浅あましければとて、氣障きざなればとて、たとい仇敵かたきなればと申して、約束はかえられませぬ、誓ちかいを破つては相成りませぬ。

白雪 誓盟ちかひは、誰がしたえ。

姥 御先祖代々、近くは、両、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪 知っています。(とつんとひぞる。)

姥 もし、お前様、その浅ましい人間でさえ、約束を堅く守つて、五百年、七百年、盟約ちかいを忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませぬばこそ、朝六つ暮六つ丑満つ、と三度の鐘を絶たしませぬ。この鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござります。

白雪 ええ、怨めうらしい……この鐘さえなかつたら、(と熟じつと視みて、すらりと立直り)衆みなに、ここへ来いとお言い。

椿 (立つて一方を呼ぶ。) 召ひいします。姫さま様が召ひいしますよ。

鯉七 (立上がり一方を) やあ、いづれも早く。(と呼ぶ。)

眷属けんぞくばらばらと左右に居流る。一同得えものを持てり。扮いでた

装ちおもいおもい、鎧よろいを着つけたるもあり、髑どくろ髒かを頭しらに頂くもあり、

百鬼夜行ていの体ていなるべし。

虎杖

いたどりにゆうどう虎杖入道。

鯖江

さばえ鯖江ノ太郎。

鯖波

さばなみ鯖波ノ次郎。

この両個、「兄弟のもの。」と同音なに名告る。

塚

十三塚こつよせおにの骨寄鬼。

蟹五郎

やぶさわ藪沢あまたのお関守は既に先刻より。

椿

そのほか、夥多あまたの道陸神どうろくじんたち、こだますだま、魑魅ちみ、魍魎もうり。

魍よう魎ろう。

影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまか

らただ灰色の布を被<sup>かぶ</sup>る。

影法師 影法師も交りまして。

とこの名のる時、ちらちらと遠<sup>おちこち</sup>近に陰火燃ゆ。これよりして明滅す。

鯉七 身内の面々、一同参り合せました。

鯉入 <sup>はばか</sup> 憚りながら法師もこれに。……

白雪 おお、遠い路を、大儀。すぐにお返事を上げましょうね、そのために皆を呼びましたよ。

姥 <sup>あなた</sup> や、彼方へお返事につきまして、いずれもを召しました？——  
—仰せつけられまする儀は？

白雪 <sup>うば</sup> 姥、どう思っても私は行く<sup>ゆ</sup>。剣ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘

ささえなくば盟約ちかいもあるまい……皆が、あの鐘、取つて落して、  
微塵みじんになるまで砕いておしまい。

姥

ええええ仰せなればと云うて、いずれも必ずお動きあるな。

(眼まなこを光らし、姫を瞻みつめて) まだそのようなわやくをおつしや

る。……身うちの衆をお召出し、お言葉がござりましては、わ

やくが、わやくになりませぬ。天の神々、きこえも可恐おそれじや。

……数かずの人間いのちの生命を断つ事、きつとおたしなみなさりませい。

白雪 人の生命のどうなろうと、それを私が知る事か！……恋に

は我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行ゆかしておくれ。

姥 ああ、お最惜いとしいい。が、なりますまい。……もう多しばらく年御辛抱

なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は仏

の末法、ひじり 聖の澆季、ぎようき 盟誓も約束も最早や忘れております。  
 やつと信仰を繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄いた蔓葛で  
つる 釣しましたようなもの、鎖も絆も切れますのは、まのあたりで  
 ござります。それまでお堪えなさりまし。

白雪 あんな気の長い事ばかり。あこがれ慕う心には、冥土の関  
 を据えたとして、夜よのあくるのも待たりようか。可よし、可よし、衆みな  
 が肯きかずば私が自分で。（と気が入る。）

椿 あれ、お姫様。

姥 これは何となされます……取棄てて大事な鐘なら、お前様  
 のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅からかねの八千  
 貫、こう瘦やせさらばえた姥が腕でも、指で挟んで棄てましよう

が、重いは義理でござりまするもの。

白雪 義理おきてや掟は、人間の勝手ずく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言わるる私が身に、袖とて、褻つまとて、恋路を塞ふさいで、遮る雲の一重ひとえもない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、盟誓ちかいなり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経たてば、ないがしろにする約束を、一呼ひと吸いき早く私が破るに、何に憚はばかる事がある！ ああ、恋しい人のふみを抱いて、私は心も悩乱した、姥、許して！

姥 成程、お気が乱れましたな。朝あけ六つ暮六つただ一度、今宵この丑満一つも、人間が怠れば、その時こそは瞬まく間も待ちませぬ。お前様を、この姥がおぶい申して、お靴に雲もつけますま

い。人は死のうと、溺おほれようと、峰は崩れよ、麓ふもとは埋れよ。劍ヶ峰まで、ただ一飛び。……この鐘を撞つく間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸仏が即座のお崇たたり、それを何となされます！

鯉七 当国には、板取いたどり、帰かえる、九頭竜くずりゆうの流ながれを合せて、日野川の大河。

蟹五郎 美濃の国には、名だたる掛い斐川。

姥 二個ふたつの川の御支配遊ばす。

椿 百万石のお姫様。

姥 我まは……

一同 相成りませぬ。

姥 お身体からだ。

一同 大事にござります。

白雪 ええ、うるさ煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、ながいき長生し

たくば勝手におし。……いのち生命のために恋は棄てない。お退どき、

お退どき。

一同、入乱れて、遮り留とどむるを、振払い、搔かい潜くぐつて、果はては  
真まんなか中とりこに取籠められる。

お退どきというに、え……

とじれて、鉄てつ杖しようを抜けば、白銀しろがねの色、月に輝き、一同

は、はツと退のく。姫、するすると寄り、颯さつと石段を駈かけ上り、

柱すに縋すがつて屹きつと鐘を――

諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰ごばちを蒙こうむつても、白雪の身よ、朝  
 日影なかげに、情の水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けようと、八  
つぎき裂つぎきにされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるる魂  
 は、幽かすかな螢の光となつても、劍ヶ峰へ飛ばいでおこうか。

と晃こうぜん然とかざす鉄杖輝く……時に、月夜を遥はるかに、唄の声す。

||ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守はどこへいた、山  
 を越えて里へ行いった、里の土産に何貰うた、でんでん太鼓しやうに笙  
 の笛 ||

白雪 (じつと聞いて、聞惚ききほれて、火焰かえんの袂たもとたよたよとなる。や  
 がて石段の下を呼んで) 姥、姥、あの声は?……

姥 社の百合でござります。

白雪 おお、美しいお百合さんか、何をしているのだろうね。

姥 恋人の晁の留守に、人形を抱きまして、心遣こころやりに、子守唄をうたいまする。

白雪 恋しい人と分れている時は、うたを唄えば紛れるものかえ。  
姥 おおせの通りでござります。

一同 姫ひいさま様、遊ばして御覧じませぬか。

白雪 思いせまつて、つい忘れた。……私がこの村を沈めたら、美しい人の生命いのちもあるまい。鐘を撞つけば仇あだだけでも、（と石段しずかを静しずかに下りつつ）この家やの二人は、嫉ねたましいが、羨うらやましい。姥、おとなしゆうして、あやかろうな。

姥 （はらはらと落涙して）お嬉しゆう存じまする。

白雪（椿に）お前も唄うかい。

椿 はい、いろいろのを存じております。

鯉七 いや、お腰元衆、いろいろ知つたは結構だが、近ごろはや  
るⅡⅡ池の鯉よ、緋鯉ひごいよ、早く出て麩ふを食えⅡⅡなぞと、馬鹿  
にしたようなのはお唄いなさるな、失礼千万、御機嫌を損じよ  
う。

椿 まあ……お前さんが、身勝手な。

一同（どつと笑う。）——

白雪 人形抱いて、私も唄おう……剣ヶ峰のおつかい。

鯉入 はあ、はあ、はッ。

白雪 お返事を上げよう……一所に——椿や、文箱ふばこをお預り。——

—衆も御苦勞であつた。

一同敬う。|| でんでん太鼓に笙の笛、起上り小法師に風車 || と唄うを聞きつつ、左右に分れて、おいおいに一同

入る。陰火全く消ゆ。

月あかりのみ。遠くに犬吠え、近く五位鷺啼く。

お百合、いきを切つて、褌もはらはらと遁げ帰り、小家の内に駈入り、隠る。あとより、村長 畑上嘉伝次、村の有志権藤管八、小学校教員齋田初雄、村のものともに追掛け出づ。

一方より、神官代理鹿見宅膳、小力士、小烏風呂助と、

前後に村のもの五人ばかり、烏帽子、素袍、雑式、仕丁の扮装にて、一頭の真黒き大牛を率いて出づ。牛の

手綱は、小力士これを取る。

村一 内へ隠れただ、内へ隠れただ。

村二 真まっくら暗だあ。

初雄 あかり灯を消したつて夏の虫だに。

管八 ふんご踏込んで ひきずりだ引摺出せ。

村のもの四五人、ばらばらと跳おどりこ込む。内に、あれあれと言

う声。雨戸ばらばらとはずるる。

まんなか真中きつに屹となり——左右を支えて、

百合 何をおしだ、人の内へ。

管八 人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄 やけつち焼土になろう、野原に焦こげようという場合であるです。

宅膳 (ずっと出で) こりや、お百合、見苦しい、何をざわつく。

唯ただいま今も、途中で言聞かした通りじや。汝きさまに白羽の矢が立った

で、否いやおう応はないわ。六ヶ村の水切れじや。米ならば五万石、

八千人のために、雨あまごい乞こいの犠牲にえになりましよう！ 小児こどものうち

から知つてもおろうが、絶体絶命ひでりの早の時には、村第一の美女

を取つて裸体はだかに剥むき……

百合 ええ。(と震える。)

宅膳 黒牛の背に、鞍くら置かず、荒縄いましに縛める。や、もつとも神妙

に覚悟して乗つて行ゆけば縛るには及ばんてさ。……すなわち、

草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の竜神に、この犠牲いけにえを奉

るじや。が、生命いのちは取らぬ。さるかわり、背はだかに裸かみ身の美女を

乗せたまま、池のほとりで牛を屠ほふつて、角ある頭ことうべと、尾を添えて、これを供える。……肉は取つて、村一同冷酒ひやざけを飲んで啖くらえば、一天たちまち墨を流して、三日の雨が降灌ふりそそぐ。田も畠はたも蘇よみがえ生るとあるわい。昔から一度もその験しるしのない事はない。お百合、それだけの事じゃ。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立とう、立ちましよう。

百合 叔父さん、何にも申しませんが、どうぞ、あの、晁さん、旦那様のお帰りまでお待ちなすつて下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拝みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八 何だとう？

初雄 貴女あなた、お百合さん、何ですか。

百合 叔父さん、後生でございます……晃さんの帰りますまで。

宅膳 ましても旦那様じゃ。晃、晃と呆あきれた奴やつめが。これ、潮うしお

の満干みちひ、月の数……今日の今夜の丑満うしみつは過されぬ。立ちまし

よう、立ちましよう。

管八 言うことを肯きかんと縛くくり上げるぞ。

嘉伝次 村こおり、郡のためじゃ、是非がない。これ、はい、気の毒な

ものじやわい。

管八 お神官かんぬし、こりやいかんでえ？

宅膳 引立ひったてて可ようござる。

管八 来い、それ。

と村のもの取込む。百合遁にげ迷う。

風呂助 罅らちあかんのう。私わしにまかせたが可うござんす。

とのさばり掛かかり、手もなく抱だきすくめて掴つかみ行く。仕丁手伝しちよう  
い、牛の背あおむに仰あおむげざまに置く。

百合 ああれ。(と悶もだゆる。)

胴たうにまわし、ぐるぐると繩なわを捲まく。お百合背せなを捻ねじて面おもてを伏ふ  
す。黒髪さつ颯さつと乱みだれて長く牛の鱗ひづめ爪づめに落おつ。

嘉伝次 宅膳たくぜんどん、こりや、きものを着きていて可よいかい。

宅膳 はあ、いずれ、社やしろの森へ参まつて、式のごとく本支度ほんしどに及び  
まするて。社務所しゃむしょには、既に、近頃このあたりの大地主おほぢゆうになれ  
らましたる代議士閣下だいぎしかくげをはじめ、お歴々衆おれいしやう、村民一同むらみいつうの事をお

憂慮きづかいなされて、雨乞あまごいの模様を御見物にお揃いでござります  
てな。

嘉伝次 その事じゃつけね。

初雄 皆、急ぐです。

管八 諸君努力せよかね、はははは。

一同、どやどやと行きかかる。

晃 (衝つと来り、前途ゆくてに立って、屹きつと見るより、仕丁を左右へ払

いのけ、はた、と睨にらんで、牛の鼻頭はなづらを取って向け、手繩たづなを、

ぐい、と緊しめて、ずかずか我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、

無言のまま、お百合のいましめの縄をふツと切る。)

百合 (一目見て) おお晃さん、(とこころげ落ち、晃のうしろに

身をかくして、帯の腰に取<sup>とり</sup>縋<sup>すが</sup>り）旦那様、いい処へ。貴下<sup>あなた</sup>。

どうして、まあ、よく、まあ、早う帰つて下さいました、ねえ。

晃（百合を背後<sup>うしろ</sup>に庇<sup>かば</sup>い、利鎌<sup>とがま</sup>を逆手<sup>さかて</sup>に、大勢<sup>おほい</sup>を睨<sup>ね</sup>めつけながら、

落着いたる声にて）ああ、夜叉ヶ池へ——山路<sup>やまみち</sup>、三の一ばかり

り上つた処で、峰裏<sup>かすか</sup>幽に、遠く池ある処と思うあたりで、小児<sup>こども</sup>

をあやす、守唄<sup>まもりうた</sup>の声が聞えた。……唄<sup>うた</sup>の聲がこの月に、白玉<sup>しらたま</sup>

の露<sup>つな</sup>を繋いで、蓬<sup>おどろ</sup>の草も綾<sup>あや</sup>を織つて、目に蒼<sup>あお</sup>く映つたと思え。

……伴侶<sup>つれ</sup>が非常に感に打たれた。——山沢<sup>みやま</sup>には三歳<sup>みつ</sup>になる小児

がある。……里心<sup>よみち</sup>が出て堪えられん。月の夜路<sup>みやまじ</sup>に深山路<sup>みやまじ</sup>かけて、

知らない他国<sup>さまよ</sup>に徜徉<sup>さまよ</sup>うことはまた、来る年<sup>かど</sup>の首途<sup>かど</sup>にしよう。帰

り風<sup>さつ</sup>が颯<sup>さつ</sup>と吹く、と身体<sup>からだ</sup>も寒くなつたと云う。私もしきりに胸

騒ぎがする。すぐに引返して帰ったんだよ。ひつかえ（と穩に、百合に向つて言い果てると、すツと立つて、瓢を逆ひさしに、月を仰いで、ごツと飲む。）

百合、のび上つて、晃が紐ひもを押え頸くびに掛けたる小笠おがさを取り、瓢を引く。晃はなすを、受け取つてかまち框かまちにおく。すぐに、鎌を取ろうとする。晃、手を振つて放さず、お百合、しかとその晃の鎌を持つ手に縋りいる。

晃 帰れ、君たちア何をしている。

初雄 あつた更めて断るですがね、君、お気の毒だけでも、もう、村を立去つてくれたまえ。

晃 俺をこの村に置かんと云うのか。

初雄　しかりです。——御承知でもあるでしょう、また御承知がなければ、恐らく白痴ばかと言わんけりやならんですが、この早ひでりです、早かんばつ魃ばつです。……一滴の雨といえども、千金、むしろ万金の場合にですな。君が迷信さるる処つりがねのその鐘はです。一度でも鳴らさない時はすなわちその、村が湖になると云うです。湖になる……結構ですな。望む処である、です、から、して、からに、そのすなわちです。今夜からしてお撞つきなさらない事にしたいのです。鐘を撞かん事になってみる日になってみると、いたしてから、その、鐘を撞くための君はですな、名は権助と云うかどうかは分からんですが、ええん！

村二三　ひやひや。（と云う。）

村四五 撞木野郎、丸太棒。しゅもくやろう まるたんぼう（と怒鳴る。）

初雄 えへん、君はこの村において、肥料の糟こやしにもならない、更に、あえて、しかしてその、いささかも用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きになるのを、お断りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。

村二三 そうだ、そうだとも。

晃 望む処だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言  
わるるから、俺には約束がある……義よつに依て守っていたんだ。

鳴らすなと言うに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時に  
ここを去る。

村四五 出て行け、出て行け。(と異口同音。)

晃 お百合行こう。——(そのいそいそ見繕いするを見て) 支度  
 が要るか、跣足で来い。茨の路は負つて通る。(と手を引く。)  
 お百合その袖に庇われて、大勢の前を行く。——忍んで様子  
 を見たる、学円、この時密とその姿を顕す。

管八 (悪く沈んだ声して) おいおい、おい待て。

晃 (構わず、つかつかと行く。)

管八 待て、こら!

晃 何だ。(と衝と返す。)

管八 汝、村のものは置いて行け。

晃 塵ひとつ葉も持つちや行かんよ。

管八 その婦おんなは村のものだ。一所に連れて行くゆ事は出来ないのだ。  
晃 いや、この百合は俺の家内だ。

嘉伝次 黙りなさい。村のものじゃわい。

晃 どのものでも差支えん、百合は来たいから一所に来る……  
とどま  
留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原すがに縋すがつて離れやせん。

(微笑して) 置いて行けば百合は死のう……人は、心のままに  
活いきねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行ゆこう。

宅膳 (のしと進み) これこれ若いもの、無分別はためにならん  
ぞ。……私わしが姪めいは、ただこの村のものばかりではない。一郡六  
ヶ村、八千の人の生命いのちじゃ、雨あまごい乞こいの犠牲にえにしてな。それじゃ  
に、……その犠牲の女を連れて行くゆのは、八千の人の生命を、

お主ぬしが奪取ぬすつて行くも同然。百合を置いて行かん事には、ここは一足も通されんわ。百合は八千の人の生命じゃが。……さあ、どうじゃい。

学円　しばらく、（声を掛け、お百合を中に晃と立並ぶ。）その返答は、萩原からはしにくかろう。代わつて私が言う。——いかにも、お百合さんは村の生命せいめいじゃ。それなればこそ、華胃かちゆうの公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、ただ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか——既に、この人を手籠てごめにして、牛の背に縄目の恥辱ちじよくを与えた諸君に、論は無益と思うけれども、衆人環めぐり視みる中において、淑女の衣ころもを奪ぬすうて、月夜を引廻すに到つては、主、親を殺した五逆罪の極悪人を罪する

にも、洋の東西にいまだかつてためしを聞かんぞ！

そりやあるいは雨も降ろう、黒雲も湧き起ろうが、それは、

慘憺たる黒牛の背の犠牲を見るに忍びないで、天道が泣かる

るのじゃ。月が面を蔽うのじゃ。天を泣かせ、光を隠して、そ

れで諸君は活きるるか。稲は活きても人は餓える、水は湧い

ても人は渴える。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を

追うて、鐘を撞く約束を怠つて、万一、地が泥海になったらど

うする！ 六ヶ村八千と言わるるか、その多くの生命は、諸君

が自ら失うのじゃ。同じ迷信と言うなら言え。夫婦仲睦じ

く、一生理木となるまでも、鐘楼を守るにおいては、自

分も心を傷けず、何等世間に害がない。

管八 黙れ、煩い。汝が勝手な事を言うな。

初雄 一体君は何ものですか。

学円 私か、私は萩原の親友じゃ。

宅膳 藪から坊主が何を吐す。

学円 いかにも坊主じゃ、本願寺派の坊主で、そして、文学士、

京都大学の教授じゃ。山沢学円と云うものです。名告るのも恥

入りますが、この国は真宗門徒信仰の淵源地じゃ。諸君のな

かには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあろうかと思う

て云います。(教員に)君は学校の先生か、同一教育家じゃ。

他人でない、扱うてくれたまえ。(神官に)貴方も教えの道

は御親類。(村長に)村長さんの声名にもお継り申す。……

(力士に) な、天下の力士は 侠客<sup>きやうかく</sup> じゃ、男立<sup>おとこだて</sup> と見受けました。……何分願います、雨乞の犠牲はお許しを頼む。

これがために一同しばらくためらう。……代議士穴限<sup>あなぐま</sup> 鋤蔵、葉巻をくゆらしながら、悠々と出づ。

鋤蔵 其奴等<sup>そいつら</sup> 騙賊<sup>かたり</sup> じゃ。また、騙賊<sup>かたり</sup> でのうても、華族が何だ、学者が何だ、糧<sup>かて</sup> をどうする！……命をどうする？……万事俺が引受けた。遣れ<sup>や</sup>、汝等<sup>きさまら</sup>、裸にしようが、骨を抜こうが、女郎<sup>めろう</sup> 一人と、八千の民、誰か<sup>たれ</sup> 鼎<sup>かなえ</sup> の軽<sup>けい</sup> 重<sup>ちゆう</sup> を論ぜんやじゃ。雨乞を断行せい。

力士真先に<sup>まつさき</sup>、一同<sup>いちどう</sup> ばらりと立懸<sup>たちかか</sup> る。

学円 私<sup>わし</sup> を縛<sup>しば</sup> れ、(と上衣<sup>うわぎ</sup> を脱ぎ棄て) かほど云うても肯入<sup>ききい</sup> れな

いなら止むを得ん、私を縛れ、牛にのせい。

晃

(からりと鎌を棄て) いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八

裂つぎき

にしろ、俺は辞せん。——牛に乗せて夜叉ヶ池に連れて行

け。犠牲にえによつて、

降らせる雨なら、俺が竜神に談判してやる。

百合

あれ、晃さん、お客様、私が行きます、私を遣つて下さい

まし。

晃

ならん、生命いのちに掛けても女房は売らん、竜神が何だ、八千人

がどうしたと!

神にも仏にも恋は売らん。お前が得心で、納

得して、好んですると云つても留めるんだ。

鉞蔵

(ふわふわと軽く詰め寄り、コツコツと杖を叩いて) 血迷

うな!

たわけも可いい加減にしろ、女も女だ。湯屋へはどうし

て入る？……うむ、馬鹿が！（と高笑いして）君たち、おい、

いやしくも国のためには、妻子を刺殺して、戦争に出るとい

うが、男児たるものの本分じゃ。且つ我が国の精神じゃ、すな

わち武士道じゃ。人を救い、村を救うは、国家のために尽すの

じゃ。我が国のために尽すのじゃ。国のために尽すのに、一晚

媽媽を牛にのせるのが、さほどまで情ないか。洩垂しが、

俺は料簡が広いから可いが、気の早いものは国賊だと思

ぞ、汝。俺なぞは、鉦蔵は、村はもとよりここに居るただこの

人民蒼生のためというにも、何時でも生命を棄てるぞ。

時に村人は敬礼し、村長は頤を撫で、有志は得意を表す。

晃 死ね！（と云うまま落したる利鎌を取ってきつと突つく。）

鉦藏 わあ。（と思わず退る。）

晃 死ね、死ね、死ね、民のために汝死ね。見事に死んだら、俺も死んで、それから百合を渡してやる。死ね、死ないか。

とじりりと寄るたび、鉦藏ひよこひよここと退る。お百合、晃の手に取継ると、継られた手を震わしながら、し、しからずんば決闘せい。

一同その詰寄るを、わツわと遮り留む。

傍へ寄るな、口が臭いや、こいつらも！ 汝等は、その成

金に買われたな。これ、昔も同じ事があつた。白雪、白雪と

いう、この里の処女だ。権勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉えて、裸体を牛に縛めて、夜叉ヶ池へ追上せた。……処女は、

口惜しき、恥かしき、無念さに、生きて里へ歸るまい。其方も、  
 ……其方も……追つては屠らるる。同じ生命を、我に与えよ、  
 と鼻頭はなづらを撫でて牛に言い含め、終よもすがら夜芝を刈りためたを、  
 その牛の背に山に積んで、石を合せて火を放つと、鞭むちを当てる  
 までもない。白い手を挙げ、衝つとさして、麓ふもとの里を教うるや否  
 や、牛は雷いかずちのごとく舞下まいさがつて、片端かたっぱしから村を焼いた。：  
 ……麓ちりにぱつと塵ちりのような赤い焰ほのおが立つのを見て、笑えみを含んで、  
 白雪は夜叉ケ池に身を沈めたというのを聞かぬか。忘れたか。  
 汝等。おれたちに指でも指してみろ、雨は降らいで、鹿見村は  
 焰ふらちになろう。不埒ふらちな奴等だ。

鉢藏 世迷言よまいごとを饒舌しゃべるな二才。村は今既に早の焰ひでりに焼けておる。

それがために雨乞するのじや。やあ衆みんな、手ぬるい、遣れ遣れ。

(いずれも猶予するを見て) 埒明らちあかな、伝吉ども来い。(と  
喚わめく。)

博徒伝吉、威おどしの長ドスをひらめかし、乾児こぶん、得ものを振つて  
出づ。

伝吉 畳んでしまえ、畳んでしまえ。

乾児 がってん 合点だ。

晁 山沢、危いぞ。

とお百合を抱くようにして三人 鐘しょうろう 楼かに駈かけ上ある。学円は奥  
に、上り口に晁、お百合、と互たに楯たてにならんと争う。やがて  
押退おしのけて、晁、すつくと立ち、鎌かぎを翳す。博徒、衆ともに下

より取巻く。お百合、振上げたる晁の手に縋すがる。

一同 遣れ遣れ、遣つちまえ、遣つちまえ。

学円 言語道断、いまだかつて、かかる、頑冥暴虐がんめいぼうぎやくの民を知

らん！ 天に、——天に銀河白し、滝となつて、落ちて来い。

(合掌す。)

晁 大事な身体からだだ、山沢は遁にげい、遁げい。

と呼ばわりながら、真前まっさきに石段を上れる伝吉と、二打三ふたうちみつ

打ち、稲妻のごとく、チャリリと合す。

伝吉退く。時に礫つぶてをなげうつものあり。

晁 (額きずつに傷き血おきを圧えて) あッ。(と鎌を取落す。)

百合 (サソクにその鎌を拾い) 皆さん、私が死にます、言分いぶん

はござんすまい。(と云うより早く胸さきを、かつしと切る。)

晃 しまった! (と鎌を振取る。)

百合 晃さん——御無事で——晃さん。(とがつくり落入る。)

一同色沮いろはばみて茫然ぼうぜんたり。

晃 一人は遣らん! 茨いばらの道は負おぶつて通る。冥土めいどで待てよ。(と

立直る。お百合を抱いだける、学円おもてと面を見合せ)何時だ。(と極

めて冷静に聞く。)

学円 (沈着に時計を透かして)二時三分。

晃 むむ、夜よごとに見れば星でも了わかる……ちようど丑満うしみつ……そ

うだろう。(と昂然こうぜんとして鐘を凝視し)山沢、僕はこの鐘を

搗つくまいと思う。どうだ。

学円 (沈思の後) うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃 (鎌を上げ、はた、と切る。どうと撞しゅもく木落つ。)

途端にももの凄すさまじき響きあり。——地震だ。——山やまなり鳴だ。——

夜叉ケ池の上を見い。夜叉ケ池の上を見い。夜叉ケ池の上を見い。真まっくら暗な雲が出た、——と叫よばび呼よわる程こそあれ、閃せ電んでん来り、瞬まく間も歇やまず。衆は立つ足もなくあわて惑う、牛あれて一蹴けりに駈かけ散らして飛ゆび行く。

鉦蔵 鐘を、鐘を——

嘉伝次 助けて下され、鐘を撞ついて下されのう。

宅膳 救わせたまえ。助けたまえ。

と逃げまわりつつ、絶叫す。天地晦か冥めい。よろばい上るもの

二三人石段に這はいかかる。

晃、切払い、追い落し、冷々然として、峰かたの方に向つて、学  
円と二人彫像のごとく立ちつつあり。

晃  
波だ。

と云う時、学円ハタと俯伏うつぶしになると同時に、晃、咽喉のどを斬  
つて、うつぶし倒る。

白雪。一際ひととき烈しきひかりものの中に、一たび、小屋の屋根

に立たちあらわ顕れ、たちまち真暗まっくらに消ゆ。再び凄じき電に、鐘

楼に來り、すつくと立ち、鉄杖てつじょうを丁ちようと振つて、下より空

さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆらゆらとなつて傾く。

村一同昏迷こんめいし、惑乱するや、万年姥まんねんうば、諸眷属しよけんぞくとともに

立ちかかつて、一人も余さず尽く屠り殺す。――

白雪 姥、嬉しいな。

一同 お姫様。(と諸声凄し。)

白雪 人間は？

姥 皆、魚に。早や泳いでおります。田螺、鱒も見えまする。

一同 (哄と笑う) ははははははは。

白雪 この新しい鐘ヶ淵は、御夫婦の住居にしよう。皆おいで。

私は剣ヶ峰へ行くよ。……もうゆきかよいは思いのまま。お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたいましようね。

たちまちまた暗し。既にして巨鐘水にあり。晁、お百合と二人、晁は、竜頭に頬杖つき、お百合は下に、水に裳

をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟と顔を  
見合せ莞爾にっこりと笑む。

時に月の光煌々こうこうたり。

学円、高く一人鐘楼しょうろうに佇みたたず、水に臨んで、一揖いちゆうし、合  
掌す。

月いよいよ明あきらなり。

(——幕)

大正二(一九一三)年三月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 卷二十五」岩波書店

1942（昭和17）年8月31日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2002年2月22日公開

2015年4月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夜叉ヶ池

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>